

マリ・パップ＝カルパンティエの『動物学』と 新しい市民教育

金山 富美

はじめに

フランスの公教育の発展と確立に大きく貢献しながら、その人間と功績に対して十分に光が当てられてこなかった教育者、マリ・パップ＝カルパンティエ（以下 P-C と略記）。すでに我々は、彼女が子供の“収容所” 同然であった保育所 *salle d'asile* を保育学校 *école maternelle* の名にふさわしい教育の場に変えた立役者であったこと、その没後に確立された初等・中等教育改革（1880年のカミーユ＝セー法、1881年と83年のフェリー法、1886年の保育学校の初等教育統合化等）の基礎を築いた人物であることを眺めてきた。また、1882年に始まる初等基礎教育への科学的知識育成の導入も、P-C 考案実践の「事物の学習 *Leçon de choses*」を踏まえて推進されたとみなされることも、明らかにした。

P-C は第二帝政下デュルイ文相の諸策に参与する経緯のなかで、この「事物の学習」（1858年『子供のための博物・事物の話』として刊行）を博物学入門へと展開・発展させ、『動物学—視覚の教育—』（1869年刊行）という教科書に具体化していく。

教科書であれば、対象は公立学校の生徒である子供である。しかし、『動物学』誕生の背景と作品の構造や概要を眺めてみると、著者は表向きの対象者以上に、子供を指導する側の人間の再教育も必要と考えて、その意図するところを本書に込めたのではないかと察せられる。つまり新しい時代の教員、また母親のための、知の、そして啓蒙の書としての役割である¹。本論考では、幅広い教育的射程をもつと推測される『動物学』について、そこに展開されている科学的知識と啓蒙感化の力について解き明かし、P-C の思想と彼女が当時の社会に果たした役割について考察を深めていきたい。

¹ 以上の内容については、拙論「マリ・パップ＝カルパンティエとその思想」（『女性空間』第23号 日仏女性資料センター 2006年 pp.63-74）及び「マリ・パップ＝カルパンティエの『動物学』—その成立と意義」（『女性空間』第24号 日仏女性資料センター 2007年 pp.67-79）を参照。

1. 作品概観

P-Cは博物学初歩として動物を取りあげた理由を、子供の内に科学的知識への興味や関心を芽生えさせるためだと述べ、その根拠を「科学その他の勉強に無関心な子供さえも、生きていて、自分と同じように動く動物の表情には感動する」²からだと説明している。ここでいう子供とは、彼女が若い頃から世話をしてきた児童、つまり親からも社会からも打ち捨てられ、学習以前の躰さえ十分に受けていない労働者階級あるいは農民の子供を主に指す。P-Cは豊富な教育経験を通して、そうした民衆の子供たちも、ほ乳類をはじめとして、鳥や虫、あらゆる自然の生き物を観察と発見の喜びの対象にできると考えた。

どの子供も一つずつ段階を経る指導により、P-Cの言葉を借りるなら「ほとんど動かない生き物で〔中略〕動物よりもむしろ植物に似たもの」³、そして自分たちとは異なる環境にあるものにまで関心を広げ、興味を深めていける可能性を秘めている。『動物学』はこの期待と確信を背景に書かれたのだろう。だからこそ、ここにはほとんどの子供がおそらく一生出会うことのないヨーロッパ以外の生き物や環形動物、軟体動物、植虫に至るまでが紹介されているのだ。

P-Cの『動物学』のユニークさは、これだけではない。自然の無味乾燥な列記ではなく、物語の面白さと味わいをもつ約50もの小話で構成され、そのいずれにも文学的と形容するにたる詩情があふれている。それは、朝な夕なの自然、また教科書の対象者と等身大の登場人物（すでに述べたように民衆の子供、つまり農家の子、羊飼、労働者の階層の男児、女児である）のあどけなさ、純朴さが目に浮かぶように表現されているからであろう。

物語の子供たちが生命の不思議と自然の驚異に感動し、周囲の大人に素朴で本質的な疑問を投げかけながら、文字通り知性ある人 *homo-sapiens* の片鱗を現す状況のなかで、作者は機を巧みに捕らえ、それら登場人物に自らを重ね合わせる児童に対して、「科学に不可欠」であると同時に「考えを定着させてくれる言葉」⁴の数々を示し、そこからものの検証、比較、識別の方法まで教え説いていく。一方で、児童にこれらの物語を読み聞かせる教師、母親も、大人の登場

² PAPE-CARPANTIER, Marie : *Zoologie des écoles, des salles d'asile et des familles — Enseignement par les yeux*, Hachette, 1873, 1ère série, Préface-VI.

³ *Ibid.*, Préface-XIV.

⁴ *Ibid.*, Quatrième série, p.191 : 動物学から鱗翅目、膜翅目等の語彙の紹介やその語義。

人物に自身を重ね合わせ、子供と同様に未知の科学の世界をのぞき見、さらにそれ以外の何ものかを発見したはずだ。このことは、ジョルジュ・サンドが『子供のための博物・事物の話』を用いて、女中を2歳程度の無知から年相応の知性にまで引き上げ、その際に彼女自身も生徒と同じ喜びを覚えたというエピソード⁵からも推し量られる。

さらに『動物学』に印象的なことは、動物がただ観察の対象として提示されるのではなく、文字通り登場“人物”さながらの描かれ方をされている点である。といっても擬人化されているわけではない。動物を擬人化すれば、ペロー寓話のように誰もが程度心おきなくフィクションの世界に酔えるだろうが、それではもはや科学とはいえない。他方、観察と記録に終始すれば、知的に未成熟な人の興味を引きつけたり、学習意欲を促すことは困難だっただろう。

当時の批評家の多くは、この庶民出身の保育所総視学官の著書を「詩的で哲学的でさえあるが、時に卑俗な現実の中を這い回っている」⁶と批判した。「卑俗な現実」と意味するものは何か。それは、『動物学』の小話が、農民や労働者の生活そのものを描写していること、そこで彼らが人間より劣等な生物とみなされる動物と密接に暮らしている状況が詳細に述べられていること、と考えられる。そこにはアカデミズムやブルジョワジーが眉をひそめるような、民衆の動物に対する扱い方の問題も含まれていた。だがP-Cは、これらの問題も動物学という科学に欠かしてはならないと考えていたのだ。動物を観察し、その真実の姿を発見するためには、人間が個々の動物に対して抱いてきた概念と接し方についても見つめ直すことが必要なのである。

ちなみに、ヨーロッパ人の自然観に関して、J. ターナーは、それが18世紀中頃から19世紀へと大きく変化し、そのことが人間も動物と同様に「縫い目のない自然の織物」に組み込まれているという意識を生み、人間にもっとも身近な自然といえる動物に対する感情を変貌させた、と説明している。そして、英米諸国においては、そこにフランス革命の熱情が深く関わることによって、人間の権利が動物の権利にまで拡大されていった結果、動物愛護が誕生した、と分

⁵ 拙論「マリ・パップ＝カルバンティエとその思想」前掲書、p.71.

⁶ GOSSOT, Emile : *Madame Marie Pape-Carpantier, sa vie et son œuvre*, Hachette, 1890, p.141.

析する⁷。英米人のこうした動物への関心は当然、革命の息吹をヨーロッパ全土にもたらしたフランスにも存在し、19世紀中頃には愛玩動物のイヌやネコだけでなく、それ以外の家畜に対しても最大限に慈悲をもって扱う姿勢が浸透しつつあった。事実、1850年には動物虐待を禁止するグラモン法が制定されている。

2. 動物と人間の物語

動物愛護の裏づけとなった新しい観念とその精神性は、そのまま『動物学』の著者の主張に看取できる。P-C自身「自然はものの無限の連鎖であり、すべてがそこに位置している。そこでは何ものもそれのみでは存在しえず、そこで自らを維持するためには他のものが必要なのだ。たとえば、私たちは動物や植物がいなければ、衣食をどうしたらよいのだろう。[中略]動物は植物がいなければどうして食べたらいいのだろう」⁸と語り、そのうえで「彼ら(=動物)は私たちと同様に、感覚があり、喜びや苦痛を感じる能力がある。それなのに！その能力を、人間は、子供でさえも、実に無慈悲なほどにしばしば忘れてる！」⁹と嘆息する。そして、家畜は人間にとって「奴隷ではなく、労働の仲間」であり「働き者なのだから、正當に扱われなければならない」、暴力をふるうのは恥ずかしい恩知らずの行動である、とたしなめているのだ¹⁰。

初等教育の教科書に、動物に対する人間の非道とその誤りを指摘する小話が数多く掲載されるのは、民衆の間にそれだけ多くの動物虐待が見られていたからであり、それが子供たちに踏襲されていく状況を作者が深く憂えていたからだろう。ただし、その残虐さの責任は民衆だけに問われるべきではない。むしろその根底にある、全ての階層にわたって了解されてきた問答無用の人間中心主義、人間が世界の絶対的支配者であるという意識を問題にすべきなのだ。また、動物の生態に関する無知が蔓延しており、無知ゆえの迷信や盲信が動物への残虐な行為を助長した。その行為の結果として動物そのものがゆがめられるが、人間は自らがゆがめた衰れな動物を見て間違った先入観を定着させ、彼ら

をますます見下す。だが、自らの姿勢についてはほとんど顧みることはない。

このことを『動物学』では、「不遇の友」と副題されるロバの小話が巧みに語る。二人の子供がロバに重い荷物を運ばせようとするが、動物は途中で立ち止まり、頑として動こうとしない。子供は父親に「この醜く馬鹿な動物」「馬のできそこない」を働かせるために打つための棒をほしいと訴えるが、父親は棒ではなく数片のパンを与えて「ロバも好意ある命令でこそ動かすことができる」と教える。続いて父親は、ロバが大人しく命令に従うことに目を丸くする子供たちに向かって、ロバは「馬のできそこない」ではなく別種の動物である、とその生態を詳しく説明したうえ、次のように語り聞かせる。

「人間は馬の世話はよくするのに、ロバには重荷を背負わせ、粗末な餌しか与えず、清潔にしてやりもしない。馬ならすぐ病気になって死んでしまうが、ロバは苦勞に耐え、我慢強いから簡単には死なない。だが、そんな彼らも、人間の過酷な仕打ちによって、体が弱り能力も衰え、日に日に愚かて鈍く、醜くになってしまうのだ。[中略]十分に世話をし、教え込めば、ロバは本来賢く優雅で美しく、非常に有能な動物だ。人間の間違った教育が、ロバを棒で打たれてようやく動く衰れな動物にする。アラビアには“砂漠の風のごとく駆ける”と形容される小型のロバがいるが、それがきびきびとして美しいのはアラビア人のロバに対する行き届いた教育の成果だ。人間は有益な動物を見下すことで自らも損をしているのだと、考えを改めなければならない。」¹¹

アラビアの旅人の暮らしを描いた本の読み聞かせから始まる「砂漠の生活」という小話も、また好例である。父親は、アラビア人は今もラクダを使って生活を送っていると話し、ヒトコブラクダやフタコブラクダの例を挙げてラクダの生態を説明する。子供がロ々にラクダの姿は醜いというと、父親は砂漠の説明をした後で次のように論ず。

「(砂漠とはまったく異なる風土の)私たちの国ではラクダを醜く感じるかもしれないが、この動物が砂漠で人間にどれほど奉仕しているかを考えるようになれば、醜いという印象はなくなる。彼らはほんの少量の餌で生き、渴きにも楽に耐える。[中略]ラクダは砂漠の舟であり、乳も出せば、毛で毛布もつく

⁷ cf. : ターナー、ジェイムズ『動物への配慮—ヴィクトリア時代精神における動物・痛み・人間性』齋藤九一訳 りぶらりあ選書/法政大学出版局 1994年。

⁸ PAPE-CARPANTIER, *op.cit.*, Première série, Préface-X-XI.

⁹ *Ibid.*, Préface-XVI-XV.

¹⁰ *Ibid.*, p.50.

¹¹ *Ibid.*, Troisième série, pp.57-69.

れ、死ねばその皮はテントとなる。アラビア人はこうした働きに感謝して、ラクダを大切に、そして正當に扱っている。アラビアにおけるラクダのように、誠実で懸命に働いてくれている動物に対して、文明化しているはずの私たちの国フランスの方こそ公正さからはほど遠い！」¹²

“醜い”動物はロバやラクダの他にも多く登場する。「生活とは」の副題を付された小話では、ナマケモノが語られる。母親からリスの巣作りや餌の貯蔵、敏捷な活動を聞いた一人の子供が「リスのようになりたい。でもナマケモノは絶対にいやだ」と叫ぶ。そこで母親はナマケモノについて語りはじめる。途中で別の子供がこの動物を「醜くのろい動物だ」と一言で片付けようとするのを、母親は制する。なぜなら、この「おとなしく無抵抗で、かわいそうな動物」の「緩慢さは、身体の構造から余儀なくされた結果であって悪徳ではない」からで、「当人の責任では決してないことを非難するのは、公正を欠く」からだ¹³。

また、いくつかの小話は、当時の人々の動物観が愚かさ、汚さ、醜さだけではなく、不気味さ、不吉、呪詛などの先入観によっていることも伝える。ペリカンの小話では、二人の子供が、縁日の大道薬売りや村の老婆から聞いた歌——「大きな白いペリカンが、自ら脇腹引き裂いて、ひな鳥育てる、血でもって！……」——で妹を怯えさせるが、若い女性教師は子供たちをなだめ、荒唐無稽な作り話をただすだろう¹⁴。醜さと不気味さに加えて悪のレッテルを貼られたために、石をもって追われてきたミミズク¹⁵やコウモリ¹⁶についても、『動物学』は、それぞれの動物のありのままの姿とそれぞれの生命の尊さについて教えていく。

『動物学』は以上のように、動物と人間の物語を通して、蔑視されてきた生き物の“無実の罪”を晴らし、誤謬に染まり動物を苦しめてきた人間に反省と正しい知識の獲得をうながす道徳的役割も果たしている。

ところで、我々はすでにあることに気づいている。それは民衆の誤った動物のとらえ方、彼らの抱く迷信や偏見、そして無慈悲な態度は、人間社会全体に

存在する、人の“他の人”に対する姿勢や行為に似ているということである。

3. 人と“人”との物語

前述のロバやラクダの小話では、アラビア人の生活と彼らが動物に対して抱く感謝と友情にも触れられ、この民族が固有の文化をもち、自ら文明人といっばばからないフランス人よりも優れた姿勢をもちえていることが、称賛とともに述べられていた。この意見は、当時フランス人の多くがアラビア人に対して抱いていた印象や意識¹⁷とは大きく異なる。

他民族、他文化に関する言及は、これ以外にも見いだすことができる。「北海の旅」ではクジラが紹介されるとともに、厳しい自然の中でクジラ漁をする人々、エスキモーやアイルランド人の暮らしぶりもまた描かれる。そこで子供たちは、「アイルランドの人々は町や港をつくり、商業活動を営み、学校ももっている！ [中略] 子供はみな読み書き、計算ができ、地理や歴史を知っている。私たちは少し恥じ入るべきだ。こんな美しい国にしながら、幼い子供ならまだしも、大人でさえたいしてものを知らないでいるのだから。」¹⁸と教わるだろう。

小話に登場する子供たちは、『動物学』を学ぶ生徒と同様に、その無知はまだ無垢と呼びうる状態にあるものの、動物だけではなく、すでに他の人々に対する見方にも差別的な先入観を忍び込ませている。町の子供は羊飼いの少年を「奇妙ないでたち」で判断し、蔑みの軽口を発したために、伯父にたしなめられることになる。一方、町の子供が鋤を見て驚くのをからかった田舎の子供は、父親から次のように諭される——「楽しくて笑うのはよいが、人が何かを知らないからといって笑ってはいけない。町から出たことがなく、農作業を知らない者にどうやって知れというのだ。[中略] 町に出れば、おまえは町の子供の誰もが知っている多くのことを知らない。[中略] 他人をからかったりせず、互いに知っていることを教えあうことが大切だ。大人になれば、学ぶべきことはも

¹² *Ibid.*, Deuxième série, pp.120-138.

¹³ *Ibid.*, Cinquième série, pp.32-36.

¹⁴ *Ibid.*, Quatrième série, pp.204-212.

¹⁵ *Ibid.*, pp.18-39.

¹⁶ *Ibid.*, Ciquième série, pp.1-22.

¹⁷ たとえば、第二共和制から第二帝政にかけて植民地の軍事指揮をとったドマの弁は、フランス人の差別的なアラビア人観を代表するものの一つといえる——「アラビア人は労働を嫌う。本質的に怠惰なのだ。」(DAUMAS, Eugène: *Mœurs et coutumes de l'Algérie*, Sindbad-Actes Sud, 1999, p.255)

¹⁸ PAPE-CARPENTIER, *op. cit.*, Troisième série, pp.156-157.

つと多くある。子供も大人も、私たち全員が、相互の学舎にある」¹⁹。

確かに無知と偏見は子供だけのものではなく、子供は大人を真似ているだけだ。多くの大人は、自身がそれに染まりきっていることにさえ気づいてはいない。『動物学』の教師が子供たちに向かって「無知な人間の精神は狭量で、それが偏見で一杯となれば因習に流されやすい。[中略]愚かな因習はしばしば残酷なものだ！」²⁰と語る時、それは民衆の動物に対する態度の是正を促しているだけでなく、それ以上に人間社会にはびこる旧弊、あらゆる偏見や差別を示唆し、それに苦しむ人々がいることと、それが悲しむべき連鎖を生むことを伝える。

P-Cがこのように、動物と人間との関係性と人間社会そのもののあり方とを同じ次元で取りあげるのは、ブルジョワ社会が掲げる動物愛護の陰に偽善、欺瞞が隠されていることに気づいていたからではないだろうか。ここで再びターナーの解釈に耳を傾けよう。

彼は動物に対する関心が19世紀に飛躍的に増大した理由のひとつを工業化と産業革命に帰し、時代の有力者に提唱された動物保護の精神は、これら大きな変革の犠牲者として「ほとんど動物的な」極貧の生活にある子供、女性、若年労働者、また精神病患者など、社会の底辺であえぐ人間への「思いやりの衝動」と切り離しては考えられない、と分析している。とはいえ、哀れな人間に対する救済は、現にある社会と経済の構造を根底から覆す危険性をはらむ。それは、ブルジョワジーが下層階級の人間のなかに人間性に潜む「動物的な要素」を見出していたのであればなおさらのことで、結局、人道的救いの手は自ら手綱をひくように、限定的なものにとどまってしまった。しかし良心の呵責は禁じ得ない。そこで、社会が罪悪感を払拭するためのはけ口としたのが、他でもない動物保護であった²¹。

動物愛護が唱えられたのには、共和主義思想の影響も大きい。ミシュレは民衆に光をあて、長く社会から疎外され搾取に苦しめられてきた彼らに新たな時代の主役としての役割と潜在的な能力を認めたが、彼がこの階級を、文字通りそれをタイトルに冠した著作において「この上なく素朴で最も無垢で多分最も不

¹⁹ *Ibid.*, Deuxième série, pp.40-41.

²⁰ *Ibid.*, Troisième série, p.69.

²¹ ターナー、前掲書、pp.59-67.

幸なもの」²²と呼ぶ動物と対照しつつ描くのは、共和主義の理想郷を感傷的なまでの動物愛護の世界と重ね合わせていたからに違いない。その文脈からすれば、当時代に初等教育改革が躍進し、それが民衆の手に届けられた理由の裏にも、新しい共和国が“動物的な人間”を対象とした“飼いならし”“調教”(éduquer)の必要性を求めていたことが想定できる。

一方、実際に下層階級の児童の日常的な世話からソルボンヌの教壇まで、あらゆる階層とその教育現場を知り尽くした『動物学』の著者は、éduquerを動物対象にしか用いず、その場合にも「穏やかに、愛をもって接する」という意味合いを込めた。P-Cは、相手が野獣であれ、人間はこの方法でもってこそ動物の「自然を改良することができる」²³とする。彼女は人間も動物も自然における仲間とは見るが、同じ自然とは考えない。人間社会に“人間”と“動物の人間”を分け隔てすることなどなく²⁴、あらゆる人間に動物とは異なる遙かな地の地平線を見出した。したがって「私たち人間のなかでも、無知のまま、あるいは無知でよいという人」は動物どころか「むしろ獣に似ているかもしれない」²⁵と語られる時、それは子供も大人も、男も女も、また民衆、ブルジョワ、あらゆる階級の区別なく、理性をもつべき人間がそれをもたぬまま、自ら学ぶことも自らの姿勢を省みることもしなければ動物にも恥じ入らねばならぬ、ということの意味する。そして、人間社会で“動物的”と見下されている人があるとすれば、それは必ずしも本人のせいとはいえ、むしろ彼らに比して自らを“人間”と豪語する人こそがその責を重く負わなければならない。

本来大人しい象を苛立たせて戦争の殺人兵器に使った人々²⁶、ツバメを益鳥と知らずに駆逐する農民²⁷、ペリカンに対する迷信を確信的に語り散らす香具師²⁸はもちろん、学問をことさら難解に提示することによって人を学びの門の

²² ジュール・ミシュレ『民衆』大野一道訳 みすず書房 1977年 p.186.

²³ PAPE-CARPENTIER, *op. cit.*, Première série, pp.78-82.

²⁴ 下層階級に動物的なものを見る社会は、その子供たちにも同じ眼差しを向けたため、教師のなかにさえ、民衆の子供に教育は無益と考える者も少なくなかった。

²⁵ PAPE-CARPENTIER, *op. cit.*, Première série, Préface-XIV-XV.

²⁶ *Ibid.*, Troisième série, pp.95-113.

²⁷ *Ibid.*, Quatrième série, pp.60-78.

²⁸ *Ibid.*, pp.204-212.

前で立ち往生させてしまう学者や教育者²⁹もまた、ものごとを、そして世界を十分に知っているとはいえない。コウモリの住む古い館で一人研究を続ける科学者は村で人狼と怖れられ、悪評をたてられた末に人間嫌いになったが、ある父子と語り合う機会を得たことで、ただ村人を無知だ、愚かだと批判ばかりすることをやめ、「私は私だけの科学という自己中心的な考えにとらわれていたかもしれない」と自身の狷介さを恥じ、村の教師になろうと決意するだろう³⁰。

ちなみに『動物学』では、全小話の半数に女性が登場し、人を導く。母親、叔母、祖母、またある時は女性教師として姿を見せる女性たちは、父親や伯父、男性教師、科学者たちと同じほど、いや、しばしば彼ら以上に博学で思慮深く、子供たちにさまざまな動物について解説しながら、人間の正しいあり方を説いていく。彼女たちはP-Cが願う女性の理想像であり、未来をつくる市民として造形されているといえる。

一方、現実の女性たちは、保育士、教師を含め、いまだ根強い教権主義のもとで「母的なもの」や情的な要素を過剰に重視、要求され、知識に関しては初歩的段階で頭打ちされて、科学的論理的思考から遠ざけられていた。だが、そんな女性たちも、未来の共和国市民である子供への『動物学』の読み聞かせを通して、自身もまた成熟した市民としての声と能力を獲得していったにちがいない。

おわりに

生涯を国家の初等教育に捧げたP-Cは、真の共和国の姿をどのように考えていたのだろうか。ヒントは『動物学』の二つの小話に求めることができる。

父親が北アメリカの堤防づくりの達人である「一民族」を紹介する。それは、残念ながらフランスでは駆逐され、ほぼ絶滅してしまったビーバーである。小さな彼らが時に15メートルにも及ぶ建造物を築くことができる秘密は、エゴイズムに陥ることのないその優れた本能、つまり協力 association によるものだ。「彼らはみんなの安全と幸福が連合 union と共同作業にあることを知っているのだろう。それなくしては大きな仕事も平和も幸せも得られない。人間も同じこ

²⁹ *Ibid.*, Quatrième série, pp.191-192.

³⁰ *Ibid.*, Cinquième série, pp.1-21.

とだ。」³¹

また母親は、一種の社会と呼びうる蜂の巣について語る。働き蜂、女王蜂、雄蜂の三種類からなる蜂の本能的な「経済観念」は、ある面で浪費に終始する人間の模範となりうるが、その裏表となる残酷さ——「単純な虫には意識もモラルもない」——の方を人間は学んできたのではないかと。なぜなら、巣の物質的繁栄のために、蜜が不足すれば雄蜂は「ごくつぶし」として、また産卵のためだけに養われる女王蜂も殺される運命にある。蜂の「共和国」では個人が団体の犠牲となって当然の社会であり、各自の人生、幸福や権利は無に等しい。母はいう——「では、私たちはそんな過ちを犯していないといえるのか。[中略] 働きたくとも働けない人々に対して、本来すべき善をなしえているのか。幼いあなた方はまだ答えられないだろうけれど、これからくり返しこの質問を問うことにしましょう」³²。

ところで1860年代末から70年のフランスの状況について「侵略と戦い、自由の夜明けとして共和国を防衛したもっとも手強い闘士のなかには女性の姿も多くあった。[中略] 女性の権利はマリア・ドレームとともに勇ましく歩を進め、[中略] そこにはジュール・シモン夫人、ポーラン夫人、ジュリー・トゥーサン夫人らによる職業学校もあった。パップ＝カルパンティエ夫人の児童教育は、オート＝フィユ街で帝政下に初等教育協会と合併していたが、実に広い意味の連合だったので、もっとも活動的な女性たちは一度にすべての団体に所属していた」³³と誇らしげに回想するのは、ルイーズ・ミシェルである。ユマニテと自由を旗印に、新しい世界の創出を目指したパリ・コミューンが『動物学』刊行の数年後に誕生したことは、決して偶然とはいえない。

³¹ *Ibid.*, Deuxième série, pp.1-17.

³² *Ibid.*, Cinquième série, pp.158-176.

³³ MICHEL, Louise : *La Commune — Histoire et souvenirs*, La Découverte, 1999, p.118.

[Résumé]

**La nouvelle instruction morale et civique contenue
dans l'œuvre *Zoologie* de Marie Pape-Carpantier**

Fumi KANAYAMA

La *Zoologie* est certainement l'un des manuels de Marie Pape-Carpantier les plus connus et les plus répandus en France vers la fin du 19^e siècle. L'ouvrage embrasse la description de tout le règne animal, du singe jusqu'à l'huître. Ce cours de sciences naturelles destiné aussi bien aux enfants qu'à leurs enseignants est composé de cinquante récits et anecdotes variées. A travers son style énergique, l'auteure essaya également de lutter contre les superstitions populaires qui amenaient communément les gens à brutaliser certains animaux vivant autour d'eux. Au delà de la simple relation de l'homme à l'animal, on peut se demander si cette façon qu'avait Pape-Carpantier d'enseigner les sciences avec amour et respect de toutes les formes de vie n'a pas contribué à développer une certaine forme d'humanisme. Son œuvre recèle, en effet, les prémisses de ce qui sera au cœur de la contestation de la société capitaliste orchestrée par la grande bourgeoisie de l'époque, à savoir les inégalités de classe, de sexe et de race. Ce n'est sans doute pas un hasard si la Commune de Paris gronda quelques années après la parution de la *Zoologie*.

